



ショートコメント

★★★★

Data

2022-10

監督・脚本：ホン・カウ
 出演：ヘンリー・ゴールドティ
 ング／パーカー・ソー
 ヤーズ／モリー・ハリ
 ス／デヴィッド・トラ
 ン

MONSOON モンスーン

2020年／イギリス・香港映画
 配給：イオンエンターテイメント／85分

2022（令和4）年1月20日鑑賞

シネ・リーブル梅田

👁️👁️ みどころ

日本が大阪万博で“わが世の春”を謳歌していた1967年当時のベトナムは、強大なアメリカ帝国主義と戦い、追い払おうとしていたからすごい。それを描けば壮大な戦争大作だが、“ボート難民”になった自分の体験を基にホン・カウ監督（の分身）が30年ぶりに祖国に戻ってみると・・・？

まずは、ホーチミン（旧サイゴン）のまちとその交通事情に注目。すさまじいバイク音とクラクション音にビックリ！なるほど、これがベトナムの高度経済成長！

“変わりゆくサイゴン”と“変わらないハノイ”。ベトナムの今を異国情緒タップリの映像美で鑑賞できたのはうれしい。他方、監督の居心地の悪さには十分納得できるが、同性愛のストーリーは無用。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

1967年、日本正逢盛世、召开了大阪万国博览会。同样在这个时期，1967年の越南正与强大的帝国美国战斗，并想要驱逐美军，十分令人敬佩。如果描绘一下那个情景的话，将是一部宏大的战争大作，不过这部作品中，许泰丰导演基于自己为了躲避战乱成为“小船难民”的经验，创作了以他自己为原型的主人公的故事。时隔30年回到祖国后，将会面临怎样的状况呢？

首先映入眼帘的是胡志明（原西贡）市及其交通情况。可怕的摩托车声和喇叭声吓了我一跳！原来如此，这就是越南的高速经济增长后的景象！

“不断变化的西贡”和“一成不变的河内”。能欣赏到充满异国情调的越南现状令人愉悦，但另一方面，虽然完全可以接受导演的别有用心，但以同性恋展开故事是没有用的。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

◆フランスを追い払い、アメリカをも追い払った国。それが、南北に細長く伸びる国、ベトナムだ。日本への留学生や就学生もかつては中国がトップだったが、今やベトナムがそ

れに代わっている。中国人も韓国人も苦手（嫌い？）だが、ベトナム人は親日的だから大好き！（?）。そんな日本人も多いが、さて・・・？

私が大学時代を過ごした1967年～71年は、国際問題の焦点がベトナム戦争一色になっていた。したがって、学生運動のスローガンの一つが「ベトナム戦争反対」になったのは当然だ。もっとも、私達日本の学生はそれを叫んでいただけだが、現実に強大なアメリカ帝国主義と戦っていたベトナム人民たちの苦労は・・・？

◆ホン・カウ監督自身の体験を元にした本作の主人公は、30年ぶりに生まれ故郷であるベトナムを訪れたキット（ヘンリー・ゴールドィング）。彼は6歳の時に家族と共にベトナム戦争後の混乱を逃れてイギリスに渡った、いわゆる“ボート難民”。彼が、今回サイゴン（現ホーチミン）に戻ってきたのは、両親の遺灰を埋葬するためだ。空港に降り立った彼が、最初に向かったのは従兄弟のリー（デヴィッド・トラン）の家。ベトナム語をほとんど話せないキットに対して、ずっとサイゴンにとどまっていたリーは、逆に英語が喋れるらしい。

それもすごいが、本作導入部では、とにかくサイゴンの街の交通事情に注目！今の日本では車のクラクションを聞くことはほとんどないが、大通りと言う大通りを大量のバイクが駆け抜けているサイゴンの街では、とにかく1台毎のバイクから鳴り響くモーター音と、やたらに鳴らすクラクションが凄まじい。しかもそれは、高層ビルが立ち並ぶ大通りだけではなく、粗末な住居や小さな屋台が立ち並ぶ裏通りでも同じだから、その喧騒ぶりはすごい。こりゃ、いまの日本とは大違いだが、きっとキットが住んでいたイギリスとも大違いだろう。

◆今時の無知な日本の若者は、なぜ昔サイゴンと呼ばれていた南ベトナムの首都が、今はホーチミンに名前を変えたのかも知らないだろう。また、そんな若者はアメリカ帝国主義と戦ったホーチミンという北ベトナムの偉大な指導者のことも知らないだろうが、それは仕方ない。「10年ひと昔」は、日本の言葉だが、本作では、冒頭から30年ぶりにサイゴンを訪れたキットのサイゴンでの“居心地の悪さ”が際立っている。

自分は何者？ベトナム人？それともイギリス人？自分はなぜサイゴンの地にやってきて、従兄弟のリーと英語で喋っているの？本作導入部では、そんなキットの戸惑いをしっかり感じ取りたい。

◆本作は私が毎日TVで観ている中国時代劇のような面白さがあるわけではなく、単に30年ぶりにベトナムに帰ってきた主人公キットの“変わりゆくサイゴン”と“変わらないハノイ”への思いを描く叙事詩。サイゴンを舞台にした前半で、その手掛かりになるのが、

そこではじめて知り合ったアフリカ系アメリカ人の男ルイス（パーカー・ソーヤーズ）だ。この2人は“一目会ったその日から”何となく奇妙な雰囲気だったが、アレレ、アレレ・・・、何とこの2人が同性愛に進んでいくとは！

他方、列車で38時間もかかるという、昔の北ベトナムの首都・ハノイでは、キットは一転して、美しい地元の娘リン（モリー・ハリス）と出会い親交を温めていくので、それに注目！

◆ホン・カウ監督の分身ともいえるキットの意向に沿って（?）、ベトナムの旅をしていくのはそれなりに楽しい。しかし、そこで再確認しなければならないのは、キットは何のために30年ぶりにベトナムに戻ってきたのか、ということ。それは、イギリスで亡くなった父親の遺灰を、故郷のベトナムで散灰するためだったが、さてキットはどうするの？

ハノイでリンやその家族から心のこもった歓迎を受けたキットだったが、そのままハノイに留まることはなく、サイゴンに戻ってきたが、それはなぜ？また、そんな彼の訪れる先はどこ？そこへのお土産は一体ナニ？そして、その語らいの中で、遺灰についてキットが語る内容は？

それらについては、あなた自身の目でしっかりと・・・。

2022（令和4）年2月4日記